

大阪大谷大学

平成三十年度 入学試験問題（一般入試 中期）

国 語

注意事項

- 一 問題用紙は全部で十ページです。解答用紙は一枚です。
- 二 解答用紙の所定欄に受験番号と氏名を記入してください。
- 三 解答はすべて解答用紙の所定欄に記入してください。
- 四 問題用紙は持ち帰ってください。

【一】次の文章を読んで、後の問に答えよ（字数制限がある場合、すべて句読点等は字数に含む。設問の都合上、原文の一部を改変している）。

（ここまでのあらすじ）マユのママとパパは数年前に離婚した。ママは仕事を持ちながら、認知症が進んだバーバ（ママの母親で、マユの祖母）の面倒を見ていた。数週間前に施設（ホーム）に入ったバーバは食事を受け付けなくなった。ママが作ったお弁当にも口を開かない。疲れ果てたママがバーバの部屋のソファで休む。ママの代わりにバーバに付き添うマユに、バーバが口元をほころばせ「ふ、ふ」と言う。そのはにかむような柔らかい表情を見て、いつかどこかで見たことのある表情だと気づいたマユは、何年前かに家族みんなで食へに行ったかき氷を思い出す。その時バーバが「ほーら、マユちゃん、富士山みたいでしよう」と言ったことも。

「バーバ、わかった、少し待ってて。マユ、かき氷買ってきてあげるから！」

気がつくのと、大声で叫んでいた。私が騒々しく部屋を出て行こうとした時、ママが目を覚ました。

「マユ、どこ行くの？」

眠そうな気だるい声で尋ねるので、

「バーバ、富士山が食べたいんだよ、絶対にそうだよ、だから今」

そう言いかけると、

「富士山？」

ママは、不思議そうに本物の富士山の方を見つめる。

「だから、何年前か前、みんなでかき氷を食べに行ったじゃない。あれだよ、あそこのなら、バーバ、食べられるんだって」

「だって、あの店は」

「わかってる！でも、行くしかないでしょっ！」

じれったくなり、つい乱暴な声を出してしまう。けれど、そうしている間にも、バーバの体に変化していくようで怖かったのだ。私は、ホームに置いてあるクーラーボックスを肩に担ぎ、猛然と部屋を飛び出した。「A」

駐輪場に停めてあった自転車にまたがり、かき氷店を目指した。大雑把に言うところには、かつて家族三人で暮らしていた町の方角にある。道なら覚えていいる。ただ、パパの車で通った時の記憶だから、交通量の多いカンセン道路を走らなくてはいけないけど。

夏休みで連休のせいとか、車がかなりジュータイしている。私は、臨機応変に歩道と車道をコウゴに走った。ぐんぐんと富士山が迫ってくる。急がなきゃ、急がなきゃ、気がつくくと、猛スピードで走っていた。「B」

何かアクシデントが起きても不思議じゃなかったけど、何も起きずにかき氷の店まで辿り着く。でも、やっぱりここも、ものすごい人だかりだ。店の前に、長い行列ができていいる。どうしたら良いのだろう。このまま待っていたら、夜になってしまいかもしれない。私は、一心に店の奥へと突き進んだ。「C」

この店では、天然氷というのを使っている。冬、プールのような所に水を貯めて自然の力で凍らせ、それを切り出してホカンし、かき氷にするのだ。店の庭では、みんなうれしそうにかき氷を頬張っている。あの時も向日葵が満開だった。確かに数年前、私達はこのままいつまでも同じメンバーでいいることに、何の疑いももたず、ここでかき氷を口に含んだのだ。

「すみません」

勇気を振り絞り、窓の所で四角い氷を機械で削っているおじさんに声をかけた。でも、周りが騒がしくて聞こえなかったのか、無視されてしまう。

「すみません！」

二度目は、声を強くした。ようやくおじさんが、できたての氷の山に透明なシロップをかけながら私の方を見てくれる。けれど、その先の言葉が繋がらない。私はみるみる泣きたくなった。ただ、バーバにかき氷を食べさせたいだけなのに。どうしてこんなに悲しく

なってしまうのだろう。けれど、早く言え、と何かが私の背中を強い力で前に押ししてくれたのだ。

「バーバが、いえ祖母が、もうすぐ死にそうなんです。それで最後に、ここのかき氷を食べたいって」

ぐっとくちびるを噛みしめ、涙の落下を食い止める。一瞬、音^②という音が世界から消えた。どうしてそんなことを口走ったのか、自分でもよくわからなかった。ママとの会話でも、ずっと気をつけて避けて通ってきた、一文字の単語^③。それが口について出たことに、自分でも驚いてしまう。

「ちよっと待ってて」

子供の言葉など相手にしてくれないかと懸念していたのに、おじさんはぶつきらぼうにそう言うと、またくるくと機械のレバーを回し始めた。目の前のカップに、白い氷の山ができていく。私は、ポケットから小銭を取り出した。かき氷一杯は買える。おじさんは、氷の小山の上から、透명한シロップをうやうやしくかけた^④。それを、クーラーボックスの中に入れてくれる。

「ありがとうございます！」

お金を払い、深々と頭を下げて、その場を立ち去った。

帰り道は、ますますスピードを上げて自転車を走らせる。クーラーボックスの中の小さな富士山が溶け出す前に、どうしてもバーバに届けなくてはならない。

「ただいま。バーバ、富士山、持ってきたよ」

ホームに戻ると、またカーテンが閉じていて、部屋全体が飴色^⑤に見える。クーラーボックスから、急いでかき氷を取り出した。もし全部溶けてしまっていたらと想像すると胸が潰れそうだったけれど、かき氷は、少し縮んだように見えるだけで、きちんと富士山の形を留めている。私は、ママにかき氷を手渡した。

「はーなちゃん、あーん」

ママはそう言いながら、バーバの口元に木製のスプーンを差し出す。バーバのくちびるは、うつすらと開いている。けれど、スプーンが滑り込めるほどの隙間はない。

「マユが、一人で買いに行ってくれたんですよ」

ママの瞳から、つるんと一粒の涙が落ちる。やがてバーバは、何かを言いかけるように上下のくちびるを広げると、スプーンを受け入れた。

「おいしいでしょう？」

⑥ママの声が湿っている。二度、三度と、バーバはスプーンの上のかき氷を吸い込んだ。そのたびに、目を閉じてうっとりとした表情を浮かべる。

私は確信する。バーバは今、数年前の夏の日、家族で行ったかき氷店のあの庭に帰っている。ごくり、と喉が鳴って、富士山の一部が、バーバの体の奥に染み込んでいく。私は窓辺に移動して、カーテンをかきわけ外を見た。富士山が、オレンジ色に光っている。すると、マユ、とママが呼ぶ。

振り向くと、ほら、バーバがマユにも食べさせたいって、と、私を手招いている。驚いたことに、バーバは自分で木のスプーンを持っている。

近づくと、私の口にかき氷を含ませてくれた。同じように、ママの口にもかき氷を含ませてくれる。ママは明らかに、私よりも年下の少女の顔に戻っていた。

「おいしいねえ」

舌の上のかき氷は、まるで冷たい綿のようだ。さーっと溶けて、消えてなくなる。体のすみずみにまで、爽やかな風が吹き抜ける。「眠くなってきちゃった」

そのままバーバのそばにいたら、泣いてしまいそうだったのだ。簡易ソファへ移動した。ママの前で泣くなんて、かつこ悪い。「軽い熱中症かもしれないから、そこで少し休みなさい」

ママが、イゲン^⑦たつぷりに命令する。バーバとママ、二人の世界を邪魔しないよう、横になってそっとまぶたを閉じる。再び目を開けた時、部屋の中があまりに静かで、^⑦胸がどきゅんと真つ二つに折れそうになった。天井が、虹色に輝いている。もしか

して……。私は起き上がって一歩ずつベッドに近づいた。バーバの隣に、目をつぶったママがいる。私は、バーバの鼻先に手のひらを翳かざした。よかった。バーバは、生きている。

くちびるの端が光っていたので、私はそこに自分の右手の人差指を当てた。そのまま口に含むと、甘い味がする。でも、さっきのかき氷のシロップの甘さじゃない。もつともつと、複雑に絡み合うような味だ。やっぱり、バーバは今この瞬間も、甘く発酵し続けているのだ。

(小川 糸「バーバのかき氷」による)

問一 二重傍線部 a と e のカタカナを漢字に直せ。

問二 「体が、風の一部になってしまっそうだった。」という一文を入れるのに最も適当なのは、本文中の「A」～「C」のどれか、記号で答えよ。

問三 傍線部①「このまま待っていたら、夜になってしまかもしれない」とマユは焦っているが、それはなぜか。理由として適当な部分を、ここより前の本文から二十字以内で抜き出して、「くから」に続くように答えよ。

問四 傍線部②「音という音が世界から消えた」のはなぜか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えよ。

- ア 祖母の死をはっきりと意識して胸が詰まったから
- イ マユの言葉に、周りの人が急に静かになったから
- ウ 緊張のあまり、一瞬耳が聞こえなくなったから
- エ 言いたい事が、一気に言えてほっとしたから

問五 傍線部③「一文字の単語」とは何か。本文中から探して記せ。

問六 傍線部④「(おじさんがシロップを)うやうやしくかけた」のはなぜか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えよ。

- ア 自分の作るかき氷に自信と誇りをもっているから
- イ シロップは丁寧にかけないとおいしくならないから
- ウ かけがえのない一杯であることに敬意を表したから
- エ 苦勞して買いに来てくれたことがうれしかったから

問七 傍線部⑤「小さな富士山が溶け出す前に、どうしてもバーバに届けなくてはならない」について、次の(1)と(2)の間に答えよ。

(1)「(小さな)かき氷」ではなく「富士山」という言葉にしたのはなぜか。次のア～エの中から考えられる理由として最も適当なものの一つを選び、記号で答えよ。

- ア 祖母を笑わせ元気づけるために、普通とは違う洒落しゃれた言い方をしたかったから
- イ 祖母が富士山と呼んだかき氷は祖母にとって幸せなひとときの象徴であるから
- ウ 特別なかき氷であつてもかき氷は全て富士山のような形をしているものだから
- エ かき氷を富士山と呼ぶのはマユと祖母と二人だけの秘密の合言葉だったから

(2)「(富士山を)どうしても届けなければならない」と思ったのはなぜか。(1)の答えも考え合わせて四十五字以内で答えよ。

問八 傍線部⑥「ママの声が湿っている」とは、ママが泣いていることを表わしているが、ママはなぜ泣いているのか。次のア～エの中から、ママの気持ちとは考えられないものを一つ選び、記号で答えよ。

- ア 家族みんながそろっていて幸せだったひとときは、今となっては取り戻せないから
- イ もう最後かもしれない母親に一番食べたかっものを味わわせることができたから
- ウ 小さかったマユが、祖母のために一人で考え行動できるほどに成長してくれたから
- エ 自分の作ったものは食べないのに、かき氷なら口にする母親をさみしく思ったから

問九 傍線部⑦「胸がどきゅんと真つ二つに折れそうになった」のはなぜか。三十字以内で答えよ。

□ 次の文章は、かぐや姫が月の世界に帰る前の様子を描いた場面である。読んで、後の問に答えよ（設問に字数制限のある場合、すべて句読点等は字数に含む）。

八月十五日ばかりの月にいでて、かぐや姫、いといたく泣きたまふ。人目も、今はつつみたまはず泣きたまふ^a。これを見て、親どもも、「何事ぞ」と問ひ騒ぐ。かぐや姫、泣く泣くいふ、「さきさきも申さむと思ひしかども、かならず心惑はしたまはむものぞと思ひて、今まで過ごしはべりつるなり。さのみやはとて、うちいではべりぬるぞ。おのが身は、この国の人にもあらず。月の都の人なり。それをなむ、昔の契りありけるによりてなむ、この世界にはまうで来たりける。今は、帰るべきにりにければ、この月の十五日に、かのもとの国より、迎へに人々まうで来むず。さらずまかりぬべければ、思し嘆かむが悲しきことを、この春より、思ひ嘆きはべるなり」といひて、いみじく泣くを、翁、「こは、なでふことをのたまふぞ。竹の中より見つけきたりしかど、菜種の大きさはせしを、わが丈立ちならぶまでやしなひたてまつりたる我が子を、なにびとか迎へきこえむ。I ゆるさむや」といひて、「我こそ死なぬ」とて、泣きののしること、いと堪へがたげなり。かぐや姫のいはく、「月の都の人にて父母あり。かた時の間とて、かの国よりまうで来しかども、かくこの国にはあまたの年を経ぬるになむありける。かの国の父母のこともおぼえず。ここには、かく久しく遊びきこえて、慣らひたてまつれり。いみじからむ心地もせず。悲しくのみある。されど、おのが心ならずまかりなむとする」といひて、もろともにいみじう泣く。使はるる人も、年ごろ慣らひて、立ち別れなむことを、心ばへなどあてやかにうつくしかりつることを見慣らひて、恋しからむことの堪へがたく、湯水飲まれず、同じ心に嘆かしがりけり。

(注)

(『竹取物語』による)

八月十五日ばかり……八月十五日が近づいたころ。

昔の契り……前世の宿縁。前世でしたことによって、現世のあり方が決まること。

いみじ……語感として程度のはなはだしいさまを表す。良い意味にも悪い意味にも用いる。

問一 二重傍線部 a と e の敬語は、誰に対する敬意を表したものか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 親ども イ かぐや姫 ウ 迎えの人々 エ かの国の父母

問二 傍線部 A～E の主語は誰か。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 親ども イ かぐや姫 ウ 使はるる人 エ 翁

問三 傍線部①「さのみやはとて、うちいではべりぬるぞ」の解釈として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア そうとじこもってばかりもられないと思って、出てきたのです。
イ そういつまでもご心配をかけられまいと思って、お話しするのです。
ウ そういつまでもこの国にいられまいと思って、帰る決心をしたのです。
エ そういつまでも隠しておけまいと思って、打ち明けるのです。

問四 傍線部②と③の「来」はどのように読むか。それぞれひらがなで答えよ。

問五 空欄 I に入る語として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア よも イ まさに ウ かならず エ すべからく

問六 傍線部④「我こそ死なぬ」を口語訳せよ。

問七 傍線部⑤「かの国」と同じことを指す言葉を本文中からすべて抜き出して答えよ。

問八 傍線部⑥「まうで来」と反対のことを述べている語を、本文中から三字で抜き出して答えよ。

問九 傍線部⑦「いみじからむ心地もせず。悲しくのみある。されど、おのが心ならずまかりなむとする」について、かぐや姫の気持ちについて、「いみじからむ心地」と「悲し」の内容、および「心ならず」と「なむ」の意味が分かるように六十字以内で口語訳せよ。

問十 『竹取物語』と同じ時代に成立した作り物語を、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 『伊勢物語』 イ 『伊曾保物語』 ウ 『落窪物語』 エ 『雨月物語』